

## 迷子の片手袋

夕方ゆうがたの五時ごじを知らせる小学校しょうがっこうのチャペルあしが聞こえてきました。冬の夕暮ゆふぐれは駆け足あしです。

遊歩道ゆうほどうの遊戯ゆうぎコーナーの鉄棒てつぼうとすべり台たいと砂場すなばで、夢中むちゅうになつて遊あそんでいたサッチャーにちゃんとお兄ちゃんにいのススムくんのとススムくんのお友ともたちは、急いそいで自転車じてんしゃに飛び乗のると、家いえをめざして一目散いちもくさんに帰かえってゆきました。

サッチャーにちゃんの自転車じてんしゃは、お兄ちゃんにいが幼稚園ようちえんのころに乗のっていた補助車ほじょくるまがついたブルー色いろです。

「ボクがいるよ！」砂場すなばのなかからブルーみきての右手かたての片手袋かたてぶくろが叫さけびましたが、サッチャーにちゃんたちは、誰だれも気付きづかずに行いってしまいました。

そろそろ遊歩道ゆうほどうの外灯がいとうが点つきはじめていました。イヌの散歩さんぽで通りかかったおじいさんが、しょんぼりしているボクきづに気付きづきました。

「忘れ物わすだな」ボクひろを拾あい上げると、ボンボンと砂すなを払い落おとして、砂場すなばの脇わきのベンチこしにおいて腰こしをかけました。

おじいさんの足あしもとに寝ねそべっていた白いしろむくイヌくんが、ベンチまえあしに前足まえあしをかけ立ち上あがると、ボクはなしに話はなかけてきました。

## (1)

「だいじょうぶだよ。朝あさになればきつと迎むかえに来てくれるさ。ひと晩ぼんだけががんばらばいいんだよ」

「ありがとう」ボクは、ちいさくうなずき、少しすこだけ元氣げんきをとりもどしました。



西にしの空そらを真っ赤まに染そめめていた夕焼ゆうやけが、あつという間まにもう消きえはじめていました。遊歩道ゆうほどうの大きなヒマラヤ杉すぎのねぐらへと帰かえるカラスくんが、心細こころこまく泣なきべそをかきかけていたボクを見みつけて舞まい下おりてきました。

「迷子まいごになったんだね。泣なくんじゃないよ。明日あしたになれば、きつと迎むかえがくるさ。ひとりぼっちで淋さびしいんだね。そうだ！話はなし相手あいてを探さがしてきてあげるよ」

さあーと羽はねをひろげて飛とびたつたカラスくんは、しばらくすると、どんぐりを二ふたつくわえて舞まい戻もどってききました。

「きみたち寒さむいんだろう、ボクのなかに入はいればいいよ」

どんぐりくんたちは、「ありがとう」と、うなずくとボクのなかにもぐり込こんできました。

「すごく暖あたたかだね」「気持ちきもちがいいね」

「眠ねむくなつてきちゃったよ」「ぼくもだよ…」

## (2)

どんぐりくんたちの寝息が聞こえはじめたとき、のらネコの三毛くんが、ぴよこんとベンチの上に飛び乗ると、話かけてきました。

「迷子になったんだね。きつと今ごろ皆が心配していると思うよ。朝になればすぐに迎えに来てくれるさ」

ボクを元気づけようと、しばらく話こんでいた三毛くんも「寒いからもう帰るよ、またね」と、闇のなかへと走って行ってしまいました。



サッチちゃんは、三つちがいのお兄ちゃんのお下がりブルーの自転車に乗れるようになったから、ブルー色が大すきになりました。今年の秋、おばあさんをお願いして、ブルーの毛糸で手袋を編んでいただいたのです。

サッチちゃんは、片方だけ編みあがったボクを、右手にはめておおよろこびでした。二階のお部屋で、おばあさんは、もう片方の手袋を編みはじめておられました。

「お月さまがシャワーあびしてますよ」

ベランダにいたサッチちゃんが、うすい雲のなかに隠れていくお月さまを、ボクをはめた手で指しながら、「ばーばー！早く見てごらんさいよ」と、大きな発見をしたように叫びました。

(3)

あの秋の夜と同じまん丸いお月さまが、顔をだしています。うすねずみ色の雲が流れてくると、やがてお月さまをすっぽりと隠してしまいました。

冷たい夜露がしのびこんできました。

ブルブルふるえていると、一枚の天狗のうちわに似た大きな桐の枯れ葉が、ヒラヒラと舞い下りてきて、ボクをすっぽりと包みこんでくれました。

「夜露を防いであげるからね。ぐつぐつと眠るといいよ。朝になればきつと迎えがくるさ。安心して眠るんだよ」



ずいぶんと長い時間がたったように思いました。

ボクが目を覚ますと、もう桐の枯れ葉くんはあたりに見当たりません。どんぐりくんたちは、まだ静かに寝息をたてています。

迷子になってから、お友だちがたくさん出来ました。

朝の日差しが明るくなっていくなかで、ボクは、夕べからの出来事を思い出しながら、「ひとつ、ふた一つ…」と指を折って数えてみました。

(4)

『白いむくイヌくん』『カラスくん』『ネコの三毛ちゃん』  
『大きな枯れ葉さん』、それに、まだボクのなかで寝息をた  
てている『どんぐりくん兄弟』。

「ちようど、ボクの指の数といっしょだ。みんなみんなや  
さしかったよ。みんなみんな親切だっよ」



お正月が過ぎて、ボカボカ春がやって来ると、手袋く  
んは、サツちゃんとお別れです。

そのころ、サツちゃんは、幼稚園の年少組に通いはじ  
めるのです。(ブルー色の大好きなサツちゃんが、「すみれ  
組」になればいいんだけど……)。

迷子の手袋くんは、サツちゃんとお兄ちゃんのススムく  
んの自転車のベルの音が聞こえてこないかなーと、じーっ  
と耳をすませながら、まだかまだか…遅いよな…と、ジリ  
ジリしながら待っていました。

(おわり)